26

『福田方』の鍼灸

寺川　華奈
日本鍼灸研究会

『福田方』全十二巻（あるいは全十三巻）は，南北朝時代もしくは室町時代前期に成立した，日本中世の代表的医学全書で，「有林福田方」とも称する．著者の有林（有隣とも．生没年不詳）の活動年代や経歴は未詳である．本書は，病門ごとに病論，病症，脈状，診断，処方が述べられ，『素問』『諸病源候論』『千金方』『和剤局方』『太平聖恵方』といった漢から元頃までの中国医薬書を，文献名を明記して引用し，また著者の私見を交えて仮名交りにて平易に記す．また全巻に鍼灸条文が散見し，巻之十二には経脈や兪穴などが記述されている．よって，本書の鍼灸条文を検討し，日本中世鍼灸研究の一助とする．テキストには，宮内庁書陵部所蔵の文明2年（1470）古鈔本（日本古典全集刊行会，『日本古典全集』五期所収，1936年影印）を使用した．

巻之一～巻之十一には凡そ61条の鍼灸条文が見える．それらは概ね①主治条文と②鍼灸に対する注意喚起のための条文に大別できる．①では，典拠，方法（鍼法，灸法，その併用），施術部位，壮数などが述べられている．②の鍼灸に対する注意事項は，全て臨床的な観点からのものである．その内訳は，灸法主治条文37条，鍼法主治条文13条，鍼灸併用主治条文2条，灸法に対する注意条文7条，鍼法に対する注意の条文1条，鍼灸法全体に対する注意の条文1条である．これは隋唐鍼灸＝日本古代鍼灸と同じだが，『医心方』の鍼灸条文が灸法条文九割，鍼法条文一割であるから，やや鍼法の浸透が感じられる．

巻之一～巻之十一各巻の鍼灸条文数は，巻之一（4），巻之二（8），巻之三（1），巻之四（4），巻之五（12），巻之六（1），巻之七（1），巻之八（5），巻之九（3），巻之十（20），巻之十一（2）である．主治證は咳逆，反胃，霍乱，水腫腹満，黄疸，脇肋痛，卒心腹痛，中悪，腰痛，中風，脚気，癧癤，傷寒，吐血，下血，痔疾，大便失禁，陰癪，妊娠，小児，咽喉病，癰疽，丁瘡，附骨疽，瘰癧，瘻瘤，腸癰，灸瘡，疣目，手足発胝，猘犬の31病證で，巻之五では脚気，巻之十では咽喉病と瘡瘍などが扱われている．穴名は巻之一～巻之四に多く見られるが，巻之五～巻之十一には余り見られない．灸法条文の穴名は亶中，間使，水分，脾兪，章門，巨闕，百会，三里，気衝，三陰交，四華，膏肓，肺の兪，及び，中風の七所灸（百会，耳前髪際，曲池，肩井，風市，三里，絶骨）である．他方，鍼法条文の穴名は肩井と水分の二穴に過ぎない．施灸の所出壮数は，1壮（1），2壮（1），3壮（8），7壮（3）の少壮と，10壮（2），15壮（1，20壮（2）のように5や10の倍数の場合，100壮（5）や500壮（1）の多壮灸，そして7の倍数である14壮（1），21壮（2）がある．典拠は，灸法条文では『千金方』(5)，『葛氏方』(3)，『銅人経』(1)，鍼法条文では『葛氏方』(1)，『道済方』(1)，『必用方』(1) が見られる．巻之一～巻之十一の鍼灸条文に限れば，まだ宋代以降の鍼灸の影響は限定的である．

巻之十二では，冒頭に脈状の詳細な説明や五蔵と脈との関係が記載され「診脈略訣」が置かれている．脈を重視するという姿勢は，巻之二・黄疸の「脈の寒熱に依て用捨あるへし」などにもみてとれる．脈への関心は，古代鍼灸と一線を画す点であり，注目すべきである．これに続く「五臓論略訣」の後，「十二経脈図」「奇経八脈」が本巻の鍼灸への導入部，次の「明堂灸穴略要」が中核部分である．そこでは先ず穴数，同身寸を論じ，仰・伏・側の三人図を掲げた後，「灸半中風七所穴者」「五蔵六府兪穴」など45穴の部位と主治を述べ，膏肓兪と騎竹馬穴を附し，人神所在などの鍼灸禁忌を述べてている．これらは『千金方』と『黄帝明堂灸経』を典拠としており，隋唐鍼灸から宋代鍼灸への移行が感じられる．